

「学生の学修実態等に関するアンケート」の結果について

【調査目的】

本アンケート調査は、大学等での学習内容や経験、大学等教育を通じて身に付いた知識・能力、大学等での学びに関する意識等、学生の学びの実態を把握し、大学教育を改善し教育の質の向上に活用する。

【調査対象】

函館短期大学在学生全員 食物 1 年 46 人、保育 1 年 47 人、食物 2 年 35 人、保育 2 年 34 人、合計 162 人

【実施時期】

令和 7 年 8 月

【調査方法】

インターネット回答（スマホ対応）にて無記名アンケート調査
QR コード付チラシを配布し、その場で回答

【調査内容】

大学で受けた授業の状況、大学での経験とその有用さ、大学教育を通じて知識や能力が身に付いたか、平均的な 1 週間の生活時間等、全 32 問

【調査結果】

回答数：147 人、回答率：90.7%、各質問集計結果をグラフにまとめ別添に示す。

【調査結果概要と分析】

本調査の回答率は 90.7%と高い結果となっており、調査実施方法が適正であったことがうかがえる。
各設問から以下のことが考えられる。

問 1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。

「よくあった」、「ある程度あった」という回答がすべての項目で 75%を超えており、授業への評価が高いことが分かる。質疑応答など、教員等との意見交換の機会（83.6%）については、相対的に低い傾向にあり、さらに質疑応答の場を増やす余地が見える。ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導（75.5%）については、理解がしやすいように教え方が工夫（97.6%）と合わせて、補助的な指導がない場合でも学習成果を実感できている可能性がある。

問 2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。

資格取得の必修ではなく別途経費がかかることもあり「経験していない」という割合が高かった。

しかし、インターンシップ、海外研修を経験した場合の有用性は高く評価されているため、参加機会を拡大し経験者を増やすことで、学習成果の底上げが期待できる。

問 3 大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか。

「よくあった」、「ある程度あった」という回答が多かった項目は、専門分野に関する知識・理解（97.9%）、将来の仕事につながる知識・態度等（96.6%）、他者と協働する力（95.3%）、幅広い知識・ものの見方（94.6%）

となっており、職業を視野に入れた専門的な教育の成果とアクティブラーニングの効果が評価されていると考えられる。協働的学習と職業に関連する内容を学ぶ必要性や意味の理解は強い一方で、外国語を使う力（32.0%）、数理・統計・データサイエンス（61.3%）については割合が低くなっており、学修成果を実感できていないことが見てとれる。特に国として、AI・データサイエンス・数理等の教育を強化し、文系、理系を問わずこれらを応用できる人材を育成することが求められているため、これらの学習意欲を上げることが課題である。また、論理的に文章を書く力（86.4%）、人に分かりやすく話す力（83.7%）は、さらなる強化をする余地が見られる。

問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

各項目で「よくあった」、「ある程度あった」という回答となっており、卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修（97.3%）、教職員が熱心に教育に取り組んでいる（93.9%）、大学の学びによって成長を実感（92.5%）より、学生の多くが大学教育を経て自らの成長を実感していることが明らかとなっている。

本学では授業アンケートから教学の改善を行っている一方、授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている（74.2%）という結果であり、四分の一の学生は、授業アンケート等が大学教育の改善に生かされているという実感を持っていないことが明らかとなっている。フィードバックについては、講義担当教員がアンケート後に改善策等をレポートし、学生が閲覧できる状態にしているが、周知を強化する必要がある。

問5 今年度前期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

「授業への出席」では、21-30時間が33.3%、31時間以上21.1%、16-20時間17.7%となっており、学修時間の中心は十分に確保されている。「予習・復習・課題など授業に関する学習」では、0-5時間60.6%と自主学習の取り組みを向上させることが課題である。「授業と直接関係しない自主学習」では、0-5時間74.9%と学習が少ない結果となっており、自律学習による自己研鑽も活性化させる余地が見られる。「部活／サークル」は0-5時間88.5%。であり、活動時間は学習に負荷がかからない範囲といえる。「アルバイト／定職」については、ばらつきがみられ学習との両立が不安な層も見られる。

以上の結果から、授業の工夫やグループワークなどアクティブラーニングが高く評価され、専門知識や協働力、将来に役立つスキルの習得実感も概ね良好であることが分かる。一方、教員との意見交換や学生の声が教育改善に反映されている実感はやや低く、双方向性やフィードバックについて半期毎に提示しており、学生への周知を改善する余地があると考えられる。また、データサイエンスなどのスキルは他項目に比べて弱いことが明らかになっており、科目履修の促進が課題であると考えられる。

以上